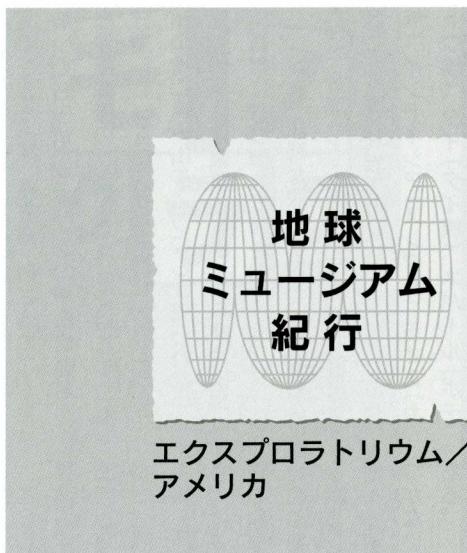


エクスプロラトリウム —科学博物館のメッカ

久保 正敏 (くぼ まさとし)
本館文化資源研究センター

一九〇六年のサンフランシスコ大震災からの復興、および一九一四年のパナマ運河開通を記念して一九一五年に開催されたサンフランシスコ万博(パナマ・太平洋万博)の跡地は、市民に親しまれる海辺の公園、そこをとり抜けると、教師に引率された小中高校生や子ども連れの家族で常にぎわう入り口に達する。昨年の入館者数は五三万人を超える。万博当時の美術館が修復され実際に、フランク・オッペンハイマーの提案を受けて一九六九年に開館したのがエクスプロラトリウム、民博と同様、万博跡地と博物館の結びつきがここでも見られる。



物理学者だったフランク・オッペンハイマーは、一九四五年に「原爆の父」として知られる兄ロバートが指揮する「マンハッタン計画」に参加し、その後も物理学の研究を大学で続けていた。しかし、その後の水爆開発に反対したことや共産党員だったことから、悪名高いマッカーシー旋風によって一九四九年に物理学界からレッド・ページ(追放)され、その後一〇年間はコロラド州で牧場経営を余儀なくされた。しかし、彼的好奇心は決して失せることはなかった。牧場経営でも日々の発明を生み、その結果一九五七年には地元の小さな高校の理科教師に招かれた。そこで、生徒たちとともに、「ゴミ捨て場から集めたさまざまなガラクタを組み合わせて、機械、熱、電気などの原理を理解する教材群を作り出していった。一九五九年にはコロラド大学に招かれて物理学研究に復帰するとともに、実験室教育の改革を進め、学生が自らのペースで物理現象を理解できるように教材を組み合わせる「実験ライブラリー」を考案した。これに基づく彼の提案が採用されてエクスプロラトリウムが開館、一九八五年に亡くなるまで彼が館長を務めた。

開館以来、この博物館は参加体験型博物館として世

の錯覚をテーマとする展示の多いのは、何事も相対化する姿勢を養う狙いがあるのだろう。また、実験スタジオを定期的に開き、担当者が応対する。その準備実験室や新しい展示を作る工作室などがガラス越しに入館者にも見える「バックヤード展示」など、世界各地で見られるハンズオン展示のルーツがここにある。

各展示には、発案・製作者の名前入りで意図と狙いが解説してある。しかし、理に落ちるきらいがあり、大人と一緒にないと子どもには理解しにくいと思う。親子連れの場合には、親にも自然科学の素養が求められるようだ。わたしにも、抽象的な知識が可視化されて腑に抜けた。わたしも、抽象的な知識が可視化されて腑に抜けた。



展示場は大人と子どもでいっぱい、お祭り広場のようだ

落ちる展示が多く、子どもよりも大人の方が楽しめるのではないか。実際、グループで楽しむ大人が多く、公式サイトの入館者統計を見ても、大人の方が子どもを上回る。展示の意図が入館者に伝わっているかどうかの展示評価を大学と共同でおこなうなど、常に企画と実施、評価が循環的におこなわれており、その点でも世界の博物館を主導してきている。



参加体験型博物館として、またアメリカ現代史の影の部分を振り返り科学教育を垣間見ることのできる場として一見の価値ある博物館、機会があれば訪れては如何だろう。